

美妙高著

夏木山

里港中作



特選 名著複刻全集 近代文学館

昭和46年5月1日 印刷

昭和46年5月10日 発行



山田美妙著

夏木立

金港堂版

刊 行 財団法人 日 本 近 代 文 学 館

東京都目黒区駒場4-3-55

代表者 塩 田 良 平

編 集 特選名著複刻全集近代文学館・編集委員会

代表者 稲 垣 達 郎

総発売元 株式会社 図 書 月 販

東京都新宿区市ヶ谷本村町35 千代田ビル

代表者 中 森 蔭 人

製 作 株式会社 ほ る ぷ 出 版

東京都千代田区麴町3-2 相互第1ビル

代表者 荒 井 正 大

東京連合印刷株式会社

東京都千代田区麴町3-2 相互第1ビル

代表者 長 尾 義 輝

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

目録

第一	籠の俘囚。
第二	玉屋の塵。
第三	花の次、次の花。
第四	柿山伏。
第五	仇を恩。
第六	武藏野。

夏木立

籠の俘囚

其上

一室の裡で會話をして居るの二人の貴人だ。

主人と見ゆる一人の瘦き身長が高く、従つて手足や顔

も骨々しく、一般の有様がまるで枯木の様に見えるが、ま

し、泥水の中にも蓮花、その償贖には艶やかな眼の星がきらめ

いてゐるので、枯木にも流石化粧が有る。構造が是だけでさ

へ有るなら、此外に否な景物さへ附いて居ないなら、貴人らし

い、「高尚な」形容詞を此人に與へるのを惜む者のあるまい

が、不運にも左様行かない。それの外でも無く此人が笑ふと

上下の齒根が顔を出すことで、其癖唇は薄過ぎて居ないの

み……是は全く齒が短いのが否、齒根が深いのが、實に其色が
 赤過ぎて居るのが、それをして目立たせる第一の原因だ。瘦
 ぎすな顔も出る紅い齒根、其上も顔の色は蒼白くて……そこで
 何やら意地が出る相も、そして薄情なやうも見える。

客と見える一人の全く主人と反對で、下重の顔を持つて居
 るが、眼が其割も細く、そして耳が小さく、猶其上も聲が些し皺
 枯れて居るので、天晴下卑な人と見える。之も「廉潔」と言ふ語
 を加へて考へると、どうも其語が人品と交情をよく爲ぬやう
 と思はれ、更「強欲」といふ藥味を添へて見ると、實に味が調ふ
 やうだ。洵もそれは違無い。この人の座方と應答の仕方、そ
 ればかりでも知れて居る。椅子も凭つても酷く背を曲げ、脚
 を縮め、そして只先方の氣も入るやうな挨拶と舉動ばかり爲

て居る。是は阿談の固有の形で、阿談の強欲の入口だ。

客は頻りに主人の容體を視て居たが、やがて身を低くして一寸其顔を仰ぎ、

「太甚差出がましい言葉で、御座いますすが、どうも先刻から御見受申しまするゝ御容貌が何やら……」

言掛けたまゝ、霎時の氣色を窺つて居ると、主人も些し笑掛ける例の齒根と露して。

「菓物も中が熟せば皮が黄ばむのさ。容貌の皮が平常の通りでないの心の中が平常の儘で無いからさ」。

「如何にも皮が黄ばみますのゝ中が熟しました故さて中を熟させますに、いづれ風雨でもありまして……」

「それの最う勿論さ。その風や雨の……どうだ、これ、黒ね、ちりあゝ」

す、御前よ、當たるうの。」

「左様でゐいます。え、あの、何でゐいましたやう。」

「何だ。」

「もし違ひましたら御赦しあそばせ。あの、多分の戀風と……」

「ふ、それから。」

「涙の雨との此二で……もし是の間違ひましたう。」

主人の顔よ、ソレデモ些しの慚かしさうな體が見えます。

「黒……黒、れぢあす。」

「そい。」

「流石に其路の黒、あぢあすだ。どうしてそれが分解つたう。」

「まことに痛入りますすが、この黒、あぢあすどて花を矯め、花を折る園藝の業に……其故に皮の黄ばむ原因のすぐ知れます。」

「是は中々かもしろい。實は今日御前を己が呼んだのは全く其事に着いた次第で……それでも流石に言出しにくく、つひ今まで黙って居るのだが、左様知れば、毒を食った跡の皿で、もはや打明かす程の勇氣も出た」。

「それも中々通常の者に出來ることでは無い、左様斷然と御勇氣を御出しあそばすことは」。

「これ、否に油を掛けるな。その油の力を藉りて、それなら舌を込らさう。實は此間不圖己の……」

「如何にも美人でゐいましてやう」。

「左様さ。美人を見初めた」。

「嗚呼、其美人の幸福だ、今羅馬で一二と争ふ貴族の壓びあす様の御目に注ぎ込んで」。

「御前の口が軽いので己の話が重くなる。其美人のうつくしさあ、己の口で言盡くせない。が、それが駭いたよ、手を回としてよく聞正して見ると、あの御前も知ッて居るだらうが、それ平民の馬あーじに、あすね、那の一人娘で馬あーじに、あと言ふ者なのさ。まア此廣い羅馬の中でも己の妻となるべきものは多分わの外に有るまいが、それゝしても己は貴族だらう、貴族だらうら平民とは法律上婚禮するとが出来ないでは無い」。」「それは生憎な事で、います。何う其處で御思案」。」「さア、それだ、その思案さ。どうしても公然と、それだから、渠を娶る事が出来ないのだ。」

「それでは御断念遊ばしまして」。

「情無い事と言ふな。何うして断念が出来るもの。断念

が出来なければこそ其思が外へあらされて……これ黒いぢいわ、
す、御前も経験は有るだらうが、それから以後は己は全で一切
夢中で、その癖夢には面影が……」

「御察し申上げます。さぞ御心苦しう申しやう。」

「うゝ本當に心苦しい。なんと、御前、御前に好い手段の
無い。御前の裁判所の役人だから世事にも慣れて居るだ
らう。この壓びあすが頼むぞ。褒美は幾許でも遣らう。」

「へゝ褒美……御褒美……御褒美などをバ決して、殿さま、それで
何です、あの馬あじに、あすが軍を出て居る隙を狙ひまして
卑官が馬あじに、あを……酷ういましてやう。」

「馬あじ、あを何うするのだ。」

「召捕って連れてまゐれば最早其跡の殿さまの御自由でム

いましてやう。

「黒^{くろ}れ、ぢ、あ、す」の誇^{ほこ}貌^{がう}、壓^{おつ}び、あ、す」の苦笑^{にがわらひ}。

「まア左^さ様^{さう}だ。けれど些^{せと}し聞^{きこ}えが變^{へん}だな」。

「なんの殿^{どの}さま。殿^{どの}さまの御^ご權^{けん}勢^{せい}で殿^{どの}さまが爲^なさる事^{こと}です
ものと」。

「は、左^さ様^{さう}言^いへば左^さ様^{さう}だけれど……何^{なに}しろあの可^か愛^{あい}らしい人^{ひと}
が吃^{びく}驚^りするのが可^か哀^{あひ}相^{さう}だ。が、宜^いい且^{かつ}、黒^{くろ}「お、ぢ、あ、す、左^さ様^{さう}してく
れ」。

「れ、此^{この}羅^ら馬^まの師^し直^{ちか}、無^む殘^{ざん}、つひに私^し慾^{よく}の奴^ど隸^{れい}となッ。羅^ら馬^ま
史^しを讀^よんだ人^{ひと}は知^しッて居^ゐるが、羅^ら馬^まの貴^き族^{ぞく}の亂^{らん}暴^{ぼう}の凡^{およ}先^{をまつ}此^{これ}程^{ほど}
で人^{じん}權^{けん}も何^{なに}も全^{まる}く無^む茶^{ちや}苦^く茶^{ちや}よして居^ゐる。實^{じつ}は制^{せい}定^{てい}の法^{はふ}律^{りつ}も
背^{そむ}いた。實^{じつ}は平^{へい}民^{みん}をバ奴^ど隸^{れい}と思^{おも}ッた。實^{じつ}は犯^{たか}した、德^{とく}義^ぎ上^{じやう}の

大罪を。實に振舞った、勝手の所業を。實に壓びあすの貴族の中でも、一二を争ふ者でした。實また其代り貴族の中で一二をあらそふ獣だ。實に黒おぢあす、世事も慣れた裁判官だ。實に、また其代り、欲又慣れた裁判官だ。實に壓びあすの好色の妖怪の妖怪。實に黒おぢあすの金錢の幽霊。好色の妖怪に金錢の幽霊、實に是が羅馬の貴族だ。

其中。

「まだ御近付にのなりませんでしたうら貴娘の此私を御存じもありまそまいが、私の壓びあすと云ふ者です。不意に貴娘の此様な室へ室の梅となつて仕舞つて嘸御心配となさいましう。最早私がまゐるッうらうの御氣遣ひありません。ま、ちと此方へ御寄りなさいと」。言ふの例の壓びあすで、今

の最う馬、あ、じ、に、わを奪ッて、此處、裁判所の内の一室へ押籠めたのだ。

馬、あ、じ、に、わの成程、壓、び、あ、すが鑑定したと知り美しい。唇の薄色の腮や鼻の下の白いので、愈目ゝ立ち、眼の中の潤澤の球の動くまゝ、ますゝ人々を悩ませる。身の舉動の蕭灑とした内に些し粘氣が有る様で、何處とて點を打たれるやうな處も無く、花の精どか月の魂どか評したいやどだ。

「貴族ゝ似合はず丁寧な、壓、び、あ、すの言葉に馬、あ、じ、に、わの薄氣味わるく、暫時と壓、び、あ、すの顔と膽詰めたまゝ、身を縮めて居る體に壓、び、あ、すの又言葉を繼た（たゞし貴族の癖として最早今度の言葉の様な丁寧でなくなつた）、

「これの何も其様ゝ恐れるにも及ぶまい。如何に私が醜男

でもまさか鬼にも見えまいが……是でも一人の人間さ。是でも目をば持つて居る。是でも鼻をば持つて居る。鼻の形を引白でも美人の香をば艷分けるよ。眼の形の下目でも美人をば毎でも見付けるよ。美うすの様な美人の像をば何時見ても美うすと認める。だが、どういふ所以だか、馬あじふ、あど云ふ美人をば美うすと見分ける事が出来ない否さ、美うすよりと猶美しく思ふのさ。

述切った最後の句が實に此場の眼目ゆる壓びあすは心を籠め、少女の顔と熟視て居ると、少女の只下を向いて耻かしさうな笑ったが、倏忽其笑を引込ませて一寸壓びあすの顔を見上げた。

「それでと貴下があの名高い壓びあす様で……あの一寸うか

がひますが、何の罪で賤妾を此處へ入れられましたのです。そこしも身よの暗い覺が……」

「覺が無いと言ひせない。御前の大層な罪造だ。其罪が有る故に此處へ閉込められたのさ」。

「それでは何様な罪科で」。

「人殺の罪科さ」。

「え、人殺、何のまアそれは滅相もない事を……」

「否、否、十分人殺の罪人だ。それ、其美しい容色が己の命を奪るでと無いか」。

少女も此處で扱ひと悟り、何うしたら宜からうと思へば赫ど氣も逆上せてはや兩眼よの涙の上潮」

「まア貴下……」

「とい貴下がどう爲たね。何だ。跡の何も言はず……は、
無言の所作事だな。實はその鹽梅と、涙を含んだ仕こなし、
いよ、妙だ、千金の値ひが有るて。それを見れば見るやど猶ほ
煩惱の犬が吼えて來て、思切りたいが思切れないたどひ死ん
でも思切れない可哀相だが思切れない。ね、これ不便と思ッ
てくれ。日外の事であつた、御前を一寸見初めてかゝはど
うした此身の因果やら薩張思切れないで、今更耻らしい事だ
が、微々耳の底に残つて居る御前の聲を想像の樂器で呼出し
て強ひて御前の側ゝ居る氣よなつたり、また時ゝ御前の顔
を此つひゝ畫などをば描いゝことの無い手で、この不器用な
手で、色々描いて、それへ向つて談話を爲たり、御前と全じ年
齡やどな婦人を見れば、あゝ己の思ふ人と那どは顔形しか違

とないのだが』とそいろゝ妄想が湧いて來たり、今それを諄々しく御前ごまへに言ふのも可笑いが、實じつは心の切なさの一通の事ではないよ」。

「まかし貴下あなた貴下あなたの御貴族ごきぞくで妾めかけの平民へいみんでは無いませんか。

それをまだ御存ごぞんじ遊ばさず……」

「船頭せんとうの舟ふねも就いて知らぬ處ところに無い。自分じぶんが思ふ人の身分みぶんを誰だれが知らず居るものか。素より御前ごまへが平民へいみんなの己おれどもも知しつて居る」。

「それならば又何故またなにかゆゑも」。

「ね、さ、法律ほうりつといふ悪い奴やつが貴族きぞくと平民へいみんとの婚禮こんらいも邪魔じゃまを入れて居るが、さア、それだ、それであつても煩惱ぼんずは決して鎮しずまる氣色けしきが無い」。